

東京都市大学

教育年報

第24号

2013年度版

東京都市大学・全学教務委員会

Web & Publishing

— 情報発信のための実践的ビジネスモデル —

工学部 都市工学科 吉川 弘道

1. まえがき

出版などの情報発信は、大学教員・教官にとって主要な役割・大切な業務の一つと考えられるが、時間的制約からなかなか踏み切れない、という声をよく聞く。本報では、「Web サイト → 出版」という構図（Web & Publishing）を、実践躬行というか、著者自身の経験を交えてお話しさせていただきたい。

改めて、学術分野/工学書/教科書など出版(Publishing)が大学人の主要な情報発信であることは論を待たない。大学名の入った図書が、書店・Amazon・図書館に並ぶこと自体が社会への発信手段となる（異論もありましようが、是ということで始めさせていただきたい）。

このような‘伝統的手法’に加えて、近年、Web サイトの開設/公開は、情報発信の有用・有力な手段となっている。波及効果大、修正追加が可能、拡散性大、低コストなど、そのメリットは大きい。常套手段ともなっているこれらのツールが、欧米に比べて大きな後れをとっていることも残念なことである（我が国の大学教官のHPにて、研究室の飲み会やイベントなどが多くアップされているのを見ると、日本はこれでいいのか？ と困惑することもしばしば）。特に、ここ数年、ブログ、SNS、twitter を併用すると、爆発的に拡散し、率直に言って‘使わない手はない’というのが衆目の一致するところである。

さて、これら新旧の情報伝達・情報発信（出版と Web サイト）は、当然の事ながら伝えたい内容（コンテンツ）は同一であることが多い。そこで、本報では、「Web サイトでの専用コーナーの開設 → コンテンツの追加/充実 → 出版」という構図を、二つの事例にてお伝えしたい。

2. 出版事例 # 1 「鉄筋コンクリートの解析と設計」

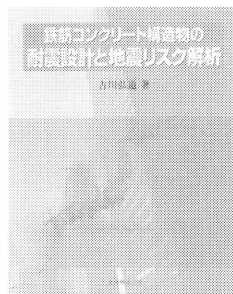
最初の事例は、小生の専門分野（鉄筋コンクリート工学）にて、伊藤忠テクノソリューションズ engineering-eye Web 講座の執筆依頼を受けたことが発端である。これは、一つの章（10～15 頁程度）を一話完結コンテンツとして連載する Web 講座である（Web 講座のトップ画面を画像 1 に示した）。



画像 1 連載した Web 講座「鉄筋コンクリート構造物の耐震設計講座」
（伊藤忠テクノソリューションズ科学工学系情報サイト engineering-eye）

当初、10 章程度の構成（目次）を組み、3 カ月の予定にて出稿を終えるべく kick-off したが、結局 3 年を費やしてしまった。Web 原稿がある程度蓄積された段階にて、出版社に出版企画書を送付し、最終的に『鉄筋コンクリート構造物の耐震設計と地震リスク解析』と題して、丸善出版より平成 20 年 2 月に刊行した（画像 2）。Web 原稿を重ねていくうちに執筆したいものが増え、当初の題目‘耐震設計’に加えて、当時手掛けた‘地震リスク解析’も加え、6 講/12 章 240 ページとなってしまった。

ここで一つの教訓は、章毎に完結した原稿を準備し、Web 公開されることを前提に執筆したことが、後々の‘出版に耐え得る原稿’になっていたような気がする。さらには、研究室の卒論生/修論生とも連携して、分かり易い数値シミュレーションの実施と良質の図表作成などが蓄積されたことも大きい。



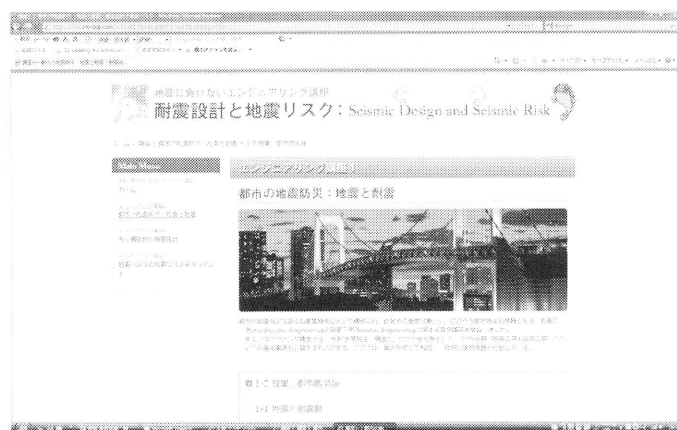
画像 2 出版事例#1

『鉄筋コンクリート構造物の耐震設計と地震リスク解析』

発行所：丸善㈱（2008 年 2 月発行）

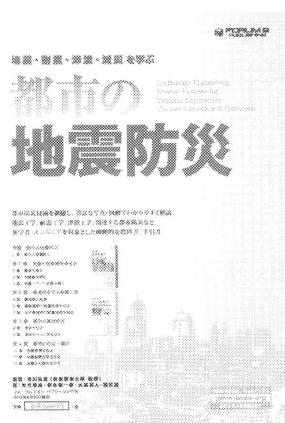
3. 出版事例 #2 「都市の地震防災」

次の事例は、複数教員による授業（都市防災論）での講義用資料を蓄積/更新して、2 年経過してから出版作業を始めた事例である。当初 2 年間、授業にて講義ノートを作成/ Web 公開し、次に 4 名にて出版チームを結成し、最終的に全 5 名の共著にて出版に至った。



画像 3 Web 講座 「耐震設計と地震リスク」

当該授業（都市防災論）では、全 15 コマのうち各週の講義を独立した 1 話として講義用ノートを作成し、小生の専用 Web「地震に負けないエンジニアリング講座 耐震設計と地震リスク」にアップロードした（当初はパワーポイントで作成し、その後ワード原稿も加えた）。各週の講義用ノートは、授業日の 1 週間前に PDF 原稿にてアップしているが、受講学生（概ね 100 名程度）はその原稿を事前に出力し、予習教材にもなっていた。ただし、実際は事前に読んでいる学生は少ない。講義用ノート（ppt またはワード）の図表/画像などは、見ているだけでもそれなりの教育効果はあった、と信じたいが。



画像 4 出版事例#2『都市の地震防災―地震・耐震・津波・減災を学ぶ―』

発刊：フォーラムエイトパブリッシング（2013年4月発行）

編著者：吉川弘道 著者：5名

4. 整理すると...

以上の二つの事例から（それまでの3冊の出版経験も含めて）、良質の Web コンテンツの作成&公開、および学術図書の出版が無事成就するためのポイントを整理してみた。

1. いきなり、目次を設定して出版原稿を出稿するのは至難の業。前後の構成を考えずに（心配せずに）、目の前にある1章分を完成させることに注力する。
2. この1章分の前稿は専用 Web のコンテンツとして掲載し、これを繰り返す（粛々と2〜3年かける）。
3. 工学書/理学書では図と表が命である。分かり易く良質の図表を作成するため、常日頃より準備する。手書き、パソコン、イラスト等々、作図/作表の対象毎に最適な手段を選ぶ。
4. いわゆる‘ポンチ絵’（概念図）は極めて重要で、他分野からでも情報収集したい。これは手書きの方が良い時がある（パソコンの作画ソフトに頼ると良いものが出来ない）。
5. 専用 Web コーナーにある程度蓄積すると（50〜70%程度）、これは、出版社への出版企画書ともなる。出版担当者としても、原稿実績を読むことができ、スムーズな契約に直結する（近年、教員が原稿を持ち込んでも、出版に至らないことが多いと聞く）。

再度、本報は Web（公開ツールであることが大切）に原稿を重ね、その後出版に繋げるということ（Web & Publishing）を披露したが、ある意味単純明快な手立てであろう（サブタイトルに記した‘ビジネスモデル’とは、過言の誇りを免れないが）。

司馬遼太郎氏の長編歴史小説『坂の上の雲』も、当初は産経新聞での連載（足掛け5年連載）から、やがては単行本（初版6巻）に至っている（大家を例示することの暴挙をお許し下さい。ここでは、歴史に残るロールモデルと考えれば良いのでは）。また、昨今の人気漫画家も、先ずは漫画雑誌（最近では、無料ウェブコミック）に連載し、（一部の超人気作家に限られるが）人気が出たところで単行本を発刊（書籍化）すると聞いている。

5. 謝辞

本報に記した事例については、丸善出版事業部、CTC 伊藤テクノソリューションズ(株)、フォーラムエイトパブリッシング、(株)Lita の方々に大変お世話になりました。企業名のみですが、記して謝意を表します。